

被災地派遣レポート〈第15回〉

主税局文京都税事務所 向後 慎一郎さん

今回は2回目の被災地支援の派遣である。今回は、6月13日～21日まで8泊9日の日程だった。

町の状況は仮設住宅が建設目標2,200戸(現在1,388戸・68%完成)水道復旧世帯も90%となっているが、現在も避難所生活を余儀なくされている方も多い。避難所数は54箇所(ピーク時86箇所)避難者数2,105名(同1,6579名)で避難所ごとに炊き出しを行っているが、材料となる物資は自衛隊によるトラック輸送に頼っている。東部3コースと西部2コースになっていて、おおむね前日までに岩手県の支援物資の集約拠点となっている、滝沢村の岩手産業文化センター「アピオ」から搬入された水・米・野菜・カップ麺・菓子等の食料を翌朝の7時50分ごろから順番に必要量を輸送トラックに積み込む作業から一日が始まる。午後は入居可能となった仮設住宅へ寝具の保管場所(竹駒小学校体育館)から毛布・タオルケット等を入居予定人数に合わせて住宅に運び入れる作業である。

震災後100日が経過して瓦礫は集積され更地が広がっている、電気は供給されているが交差点の信号機は無く大阪府警・京都府警の警官が手信号で交通整理を行っている。暑い中、砂埃の場所で大変である。動脈であった気仙大橋が津波で流失してしまい迂回ルートで渋滞も起きているが、9月の開通予定が前倒して7月中旬に開通と発表されて、渋滞もだいぶ緩和されるであろう。

仕事が終わって、50キロはなれた遠野市へ帰る途中の赤羽根峠を超えると絵に描いたような東北の田園風景が広がる。宿の女将さんと話す機会があり、曾祖父は「山奈宗真」といい、殖産家として酪農・養蚕業をしていたが、約115年前の明治29年6月15日に発生した「明治三陸大津波」(約2万2千名が犠牲となった。)のあと、7月末から44日間にわたり、総延長700キロの険しい海岸線を歩き、津波の浸水息・高さ・被害状況を調査した偉人であったという。(記録は残念なことにほとんど活用されなかったようである。現在、遠野市博物館で展示中)

市の職員との話の中で、仮設に入ると支援物資は貰えないとしているが、設置場所が不便で店舗も無い状況では難しく、特に高齢者は大変である。彼も自宅は流されて市役所の屋上で一命をとりとめた。震災以降は給食センターの物資の隙間に寝泊りして休みもなく支援物資の供給を行っていた。(現在は住田町の仮設に入居)

短期間の支援であったが、少しでもお役に立てたかな?と思う。機会があれば、3回目も応募したい。



〈自衛隊のトラックに米の積み込み作業〉



〈陸前高田市職員と共に撮影〉